

なか じま もと き
中 嶋 幹 起

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 106 号
学位授与年月日 平成7年2月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 中国境内の諸言語の記述的・文献的研究
— 漢語諸方言及び満洲語を中心として —

論文審査委員 (主査)
教授 花 登 正 宏 教授 中 村 完
教授 平 野 日出征

論 文 内 容 の 要 旨

論文の構成

はじめに

総説

第1部 漢 語

小序

第1章 北方漢語

1 甘肅漢語方言の記述的研究

- (1) 甘肅の夏河(ラプラン)方言の地域特徴 — 漢語とチベット語との言語接触
- (2) 甘肅の民勤方言の地域特徴 — 漢語と遊牧民の言語との接触

2 中原官話の記述的研究

3 山東方言の記述的研究

第2章 南方漢語

1 呉語の記述的研究

2 湘語の記述的研究

3 閩語の記述的研究

4 粵語の記述的研究

粵語の研究史

5 僮(チュワン)語の記述的研究

紹介 日本の中国言語学研究(1973-1983)

第2部 満洲語

小序

第3章 北京の満洲人の家庭の言語

第4章 満洲語の「猿」と「猴」——アルタイ語とシナ・チベット語との言語接触

第5章 北京図書館蔵『漢字解學士詩』の研究

第6章 電脳処理『御製増訂 清文艦』

紹介 中国の満洲語研究の近況——『満漢大辞典』の刊行によせて

著書及び論文(初出誌)一覧

本論文の中には、すでに、著書やモノグラフとして公刊されたものが少なくない。論文集に収録されているものもある。また、公刊されていないが、学術会議で配布されて、口頭発表を経ている論文もある。これらは、以下の各章において、逐一、記されているとおりである。中国語の論文については、あらたに邦訳した。その際、若干、加筆した部分がある。米印を付したもの(口頭発表要旨及び数編の論文)を除いて、これらすべては参考文献として提出するものである。

総説

「アジアの諸言語の類型」(論文)、『第2回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編 アジア その多様な世界』pp. 25-37. 朝日出版社 1988年7月

第1部 漢語

第1章 北方漢語

1 甘粛漢語方言の記述的研究について

- (1) 「甘粛漢語方言的特點——關於夏河(拉卜楞)話的語言接觸」(論文)、『中央研究院歷史語言研究所會議論文集之2 中國境内語言暨語言學 第1輯 漢語方言』pp. 485-492. 中華民國 中央研究院 中華民國81年[1992年]5月

「第2のチベット——漢族との接点から——」(論文)、アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』第62号 pp. 1-3. 1988年3月

※「辺境における言語接触の1例——甘粛省夏河県(ラプラシ)の言語調査から」(論文)、『東方』85 pp. 2-5. 東方書店 1988年4月

- (2)※「民勤音系簡介」(口頭発表要旨)、(中国方言学会第4回大会)中国 山西省 1985年7月

「甘粛方言調査の旅から」(論文)、アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』第57号

pp. 24-26. 1986年8月

2 中原官話の記述的研究について

『中原官話 課本』(賀巍、大塚秀明、山田真一と共同執筆、但し「まえがき」には、「発音編」[pp. 1-56]は、著者[中嶋幹起]の執筆であることが明記されている)。523pp. 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1987年

3 山東方言の記述的研究について

『山東方言基礎語彙集』(著書)、596pp. 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1989年

第2章 南方漢語

1 呉語の記述的研究について

(1) 上海語について

『呉語の研究——上海語を中心にして——』(著書)、750pp. 文部省科学研究補助金「研究成果刊行費」による出版 東京 不二出版 1983年 本書は下記の(2)を副本として金田一京助博士記念賞を授賞(昭和61年度)している。

「上海語」(論文)『言語学大辞典』第2巻 pp. 214-218. 三省堂 1989年

「蘇州語」(論文)『言語学大辞典』第2巻 pp. 496-500. 三省堂 1989年

(2) 浙南呉語について

『浙南呉語基礎語彙集』(著書)、841pp. 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1983年

2 湘語の記述的研究について

『湘方言調査報告 上冊』(著書)、263pp. 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1987年

『湘方言調査報告 下冊』(著書)、198pp. 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1990年

※「湖南零陵話和広西龍勝伶話——湘方言的一致性初探——」(口頭発表要旨)、(第15回 国際シナ・チベット言語学会) 中国 北京 1983年

3 閩語の記述的研究について

『閩語東山島方言基礎語彙集』(著書)、276pp. 日本語索引(別冊)東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1977年

『福建漢語方言基礎語彙集』(著書)、353pp. 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1979年

「閩語」(論文)『言語学大辞典』第3巻 pp. 613-620. 三省堂 1992年

「閩海方言」(論文)『言語学大辞典』第3巻 pp. 619-620. 三省堂 1992年

「閩東語」(論文)『言語学大辞典』第3巻 pp. 627-630. 三省堂 1992年

- 「閩南語」(論文)『言語学大辞典』第3巻 pp. 630-634. 三省堂 1992年
 「閩北語」(論文)『言語学大辞典』第3巻 pp. 634-637. 三省堂 1992年
 「海南語」(論文)『言語学大辞典』第1巻 pp. 1125-1128. 三省堂 1988年

※ 'Fukienese Folk Songs of Tungshan Island' (論文)、“Research on Chinese Traditional Entertainments in Southeast Asia, Part 1 Hong Kong” Edited by Kanehide Onoe pp. 109-154. The Institute of Oriental Culture, University of Tokyo 1982. 3.

4 粵語の記述的研究について

- 『広東語4週間』(著書)、333pp. 大学書林 1981
 『現代廣東語辭典』(著書)、840pp. 大学書林 1994
 「香港の人々と暮らし 言語」『もっと知りたい香港』(論文) pp. 166-178. 弘文堂 1984年

5 僮(チュワン)語の記述的研究について

- ‘The Preliminary Report on the Basic Vocabulary of the Tai Dialect of Kweilin’ (論文)、“JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES” NO. 16. pp. 145-162 ILCAA 1978.
 ‘A Report on the Basic Vocabularies of the Tai Dialectal Variation of Wuming’ (論文)、“JOURNAL OF ASIAN AND AFRICAN STUDIES” NO. 20. pp. 224-239 ILCAA 1980.
 “Japanese Studies on Chinese Linguistics 1973-1983” (論文)、30pp. The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco 1993.

第2部 満洲語

- 第3章 ※「世界の女性語 満洲語」(論文)『日本語学 特集 世界の女性語 日本の女性語』第12巻 pp. 74-77. 明治書院 1993
- 第4章 ※「満語的‘猿’和‘猴’」(北京満学学術討論会〔1992年7月〕にて口頭発表)、本論文は、北京社会科学院満学研究所編『満学研究 第2輯』(吉林文史出版社 1994年6月刊行予定)に論文として収録される予定。
- 第5章 ※「北京図書館蔵『清字解學士詩』の研究」(論文)、『アジア・アフリカ言語文化研究所30周年記念論文集』東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1994年6月刊行予定。
- 第6章 『電腦処理 御製増訂清文艦』(第1冊)(著書)、390pp. 中嶋幹起編、今井健二・高橋まり代協力 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1993
 『電腦処理 御製増訂清文艦』(第2冊)(著書)、390pp. 中嶋幹起編、今井健二・高橋まり代協力 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1994
 「『電腦処理 御製増訂清文艦』(第1分冊)刊行に寄せて」(論文)、『言語文化接触に関する研究』第6号 調査報告「中国周辺部における言語接触と社会文化変容——漢族文化と非漢族文化との相互関係——」(中嶋幹起編) pp. 147-159 東京外国語大学 アジ

紹介 ※「中国の満洲語研究の近況——『満漢大辞典』の刊行によせて」(論文)(東方書店『東方』[1994年上半年中の号]に掲載される予定)

はじめに

筆者の言語研究は、中国と香港をフィールドにして、歳月をかけた臨地調査によっておこなわれてきたものである。記述的研究の対象は、著書や論文の刊行、発表の順からもわかるように、まず、南方漢語諸方言からはじまっている。つぎに、北方漢語に移り、そのことが契機ともなって、漢語とは言語の系統の異なるアルタイ系に属する満洲語の文献的研究に向かっている。

筆者の言語の理解と認識は、中国境域内に分布する“個”の記述とそれに基づく整理とに始まっている。そして、“個”への認識を深めるにしたがって、“個”の集合としての多様性への関心が生まれている。では、どうして、そのような多様な言語が生じるのか、筆者はその1つの答を、多数の民族が雑居する甘粛の漢語方言の記述的研究を通してえられた「言語接触」に求めているのである。「言語接触」とは、換言すれば、民族と言語の相互浸透関係といってもよい。また、そこには、接触を通じて起きた言語の統合の姿をみることもできるだろう。筆者にとって、新しいタイプの言語の誕生を目の当たりに見せてくれる甘粛という土地柄は、実に、興味深くおもわれる。

目を中国南部に転じれば、タイ系の諸民族の言語と接触して、同化が進み、混合して、今では、そのような歴史の記憶さえも消失してしまっている南方漢語方言のなかに、依然、存在している非漢語的基層について考える手がかりを、甘粛での言語観察の体験は、あたえてくれるようにおもえるのである。

このような「言語接触」の視点に立った記述的研究を通してえられた理解は、東アジアに起こった、シナ・チベット系言語とアルタイ系言語に関わる、興味深い「言語接触」の問題をあらたに視野に入れて、「満漢合璧」資料を考察の対象にしているのである。

本論文は、2部に分かれ、第1部では漢語を、第2部では満洲語を、それぞれ扱っている。各章における記述は、著書、モノグラフがあるときは、要点ならびに本論文にかかわる問題の所在と筆者の解釈を示すこととし、詳細はそれらの参考文献にゆずりたいとおもう。

第1部 漢 語

小序

中国の総人口12億のうち、10億余りをしめる漢族は、人口密度の高い東部地域に住んでいる。これは、中国の国土全体からすると、3分の1の広さにすぎない。近代になって、漢族は、西北地域や東北地域に入植して、開拓の波がおしよせたが、全体からみれば、西北と東北には、まだそれほど人が住んでいない。漢族は、多少でも教育を受けた人なら全国で通用する言語規範である「普通話」(標準中国語)を話すか、かれらの本当の言葉は、生まれ育った土地の言葉、すなわち、方言

である。方言は、言語構造からみれば、驚くほど多様であるのだが、あまり区別されずに、単一の言語の変種を喋っていると考えられているようである。これは、言語事実に対して、無知であるからではなくて、文化的な考えによっている。すなわち、中国人の間では、漢語が、共通の民族的伝統をもった単一の人間集団によって話されている言語であると信じられているからなのである。このような、動かしがたい、漢語を単一言語とみる観点に対して、本論文で述べる西北部をはじめとする中国各地の漢語諸方言の言語構造は、われわれに、あらためて考えさせる材料を提供してくれる。

第1章 北方漢語

1 甘肅漢語方言の記述的研究

漢語は、言語構造の違いによって、概略、北方型漢語と南方型漢語の2大別がされてきた。この南北をあわせた東部に対するもう一方の極、すなわち、西北部の漢語（従来から西北官話と総称される）の特異性に言及されることは少なかった。ここでは、甘肅の夏河（ラブラン）と民勤の両方言についての記述的研究を示した。このふたつの西北官話の記述的研究によって知りえたことは、

- (1) 弁別要素の調素 (toneme) の数が極端に少なくなり、声調を失っている土語すらある。
- (2) 指示詞において、母音の交替による格標示をもつ土語があって、主格と与格とを区別している。

助詞には、対格、奪格、具格を表す形式をもつものもある。

- (3) 漢語の基本的な構造であるVO型の語順が転倒して、OV型になっている。などの、甚だしく漢語らしからぬ、チベット語化乃至はアルタイ語化した言語構造をもっているという事実である。

このような、いわば、周囲のチベット語やアルタイ諸語との頻繁な接触によって、構造的変化をうけて生まれた新しいタイプの「漢語」は、甘肅、青海、新疆、内蒙古など西北一帯に広く分布しているのである。

2 中原官話の記述的研究

中原官話とは、河南省を中心として話されている漢語方言である。この方言には、「変韻」とよばれる韻母の交替現象がみとめられる。これは、基本韻母が交替韻母の形をとることによって、名詞ならば、名詞化が起り、動詞ならば、動詞化が起ることをいう。これには母音の交替による語形変化がともなうので、形態論の上からは屈折があるとみられるのである。

筆者の中原官話の研究は、『中原官話 課本』（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1987年）の発音編にまとめられている。

3 山東方言の記述的研究

山東省内の土語群は、音韻特徴によって、4つのタイプに分けられる。その1つは河北省と接する西北部の北方官話であり、その1つは河南省と接する西南部の中原官話であり、その1つは山東半島を西から東に向かって延びる膠東地区に分布する土語群であり、その1つは、臨沂地区に分布する土語群である。

山東方言には、中原官話と共通する「変韻」がみられる。「晋語」の音韻特徴とする入声も発見された。膠東と臨沂の両地区で話されている土語には、精母字が端母字と同じように発音されるなど特異な特徴があったり、全濁音が無声無気で発音されるなど、古層を残存しているとおもわれる特徴がある。

筆者は、1985年5月に山東省の昌邑県と費県において臨地調査をおこなった。そのときの研究は、『山東方言基礎語彙集』（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1989年）にまとめられて、公刊されている。この研究は、当時、続行中であった甘肅、山西、河南などの北方方言全般にわたる鳥瞰をえるうえで必要としたからにはほかならない。

第2章 南方漢語

1 呉語の記述的研究

呉語とは、揚子江河口以南から、海岸沿いに江蘇省と浙江省で話されている漢語方言の総称である。使用人口は、推定、およそ、8千5百万人。呉語と非呉語とを区別する主なる音韻特徴は、声母に、古漢語の全濁音に由来する有声音声母（有聲の閉鎖音、破擦音、摩擦音）をもっていることである。

筆者による呉語の研究は、『呉語の研究——上海語を中心として——』（東京 不二出版、1983年 750pp. 文部省科学研究補助金「研究成果刊行費」による出版）及び『浙南呉語基礎語彙集』（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1983年 841pp.）として、2冊の著作にまとめられ、刊行されている。

前者の著作では、上海市郊外の、上海県三林塘出身の発語者を対象にして、典型的な「浦東語」の音韻と語彙について総合的な分析と整理をおこなっている。内容は、4つの章と資料部分の語彙集の部分からなっている。第1章では、当該方言の音韻体系を述べ、第2章では、上海市と郊外地区の方言との共時的差異について比較検討をおこない、第3章では、中古漢語の音韻体系との対照をおこない、第4章では、呉語下位方言（寧波、舟山、天台、浦江、樂清、温州）の資料をもとに、呉語の共通性について検討されている。その他、同音字表、中古音と上海語音との対照表が付され、語彙集が収録されている。

後者の著作では、浙江省南部で話されている呉語として、温州と樂清との2つの方言をとりあげ、音韻と語彙について記述したものである。筆者の執筆による「呉語」「上海語」「蘇州語」の3つの項目の記述（『言語学大辞典』三省堂 第1巻〔1988年〕、第2巻〔1989年〕所収）は、上述の呉語研究にもとづいている。

2 湘語の記述的研究

湘語に対する筆者の関心は、呉語と同じく、古漢語の全濁音の現代の方言への反映である。湘語の古層を残存するとみられる「老湘方言」に共通する音韻的特徴は、中古音の音韻的枠組みをものさしとして、次の4つの点にまとめることができる。すなわち、

- (1) 古漢語の全濁声母をほぼ完全な形で保存していること。
- (2) 古漢語の入声は、舒声化していて、音節末尾において、閉鎖音をもっていないこと。
- (3) 舒声化した入声は、類をなして、陽平と陰去（独立した調類をなしているものもある）に帰属していること。
- (4) 声調は5種で、調値についても相当程度の一致がみられること。

筆者は、1981年の秋から冬にかけて3か月間を、湖南省長沙市を拠点にして、各地の湘語の調査をおこなった（そのときの調査のもようについては、「学術研究の動向——中国南方の言語調査から帰って」（日本学術振興会『学術月報』Vol. 35 No. 40 1982 Jul.）に報告した）。その調査資料にもとづいて、『湘方言調査報告』（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 上冊 263 pp. 1987年、下冊 198pp. (1990年)）としてまとめられて、公刊されている。

上冊では、湖南省の省境界部に位置する4つの地点（阮陵、会同、郴県、平江）について音韻が記述されている。この4つの地点の方言は、筆者の研究に先行する『湖南方言調査報告』（楊時逢著、中央研究院歴史語言研究所專刊之66、1974）にも収録されているが、筆者のえた調査結果と比較対照すると、かなりの不一致がみられる。この不一致の理由は、双方が記述対象とした方言の地理的あるいは世代的な差異に求められるものではなく、基本的には、拙著に先行する前掲報告書の記述の不備（すなわち、口語音の採録が十分にされていないこと）によるものとみなして差し支えないとおもう。

この上冊中の4つの方言の口語音層において、平江と郴県の両方言は、全濁音が一律に無声帯気音となって、贛客家語の特徴を示している一方、阮陵と会同の両方言では、全濁音が仄声において無声帯気音となり、平声では有声音（阮陵）、無声非帯気音（会同）になっている。かくして、全濁音を基準にすれば、阮陵方言は、会同方言の形へと変化してゆく前段階のごとき状態を示しており、両方言は、依然、贛客家語の特徴を濃厚に保持していることがうかがえるのである。

下冊では、湖南省の中央部から西南部に位置する、湘郷（月山）、双峰、新化（横陽山）、新化、武岡、祁東（新橋）、邵陽、零陵（蔡家舗）、零陵のあわせて9つの地点の土語群である。湘語は、「老湘方言」については、若干、差異もあるが、全体的には、均質性を示していることがうかがえる。

3 閩語の記述的研究

閩語とは、中国諸方言を6大支系にわけたとき、北方語、呉語、湘語、客家語、粵語とともに1支系をなす大方言群を指している。閩語は、福建省を中心に、浙江省東南部から、台湾、広東省東部の潮汕地区、海南島、雷州半島などで話されているが、下位方言としては、（福州語を代表とする）閩東語、（莆田、仙遊語を代表とする）莆仙語、（アモイ語を代表とする）閩南語、中央山間部の閩中語、（建甌語を代表とする）閩北語の5種がある。

筆者の閩語研究は、『閩語東山島方言基礎語彙集』（東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 1977年 276pp.）及び『福建漢語方言基礎語彙集』（東京外国語大学 アジア・アフリカ

言語文化研究所 353pp.)として、2冊にまとめられて、公刊されている。

前者の著作は、筆者が、1973年から1年半にわたって香港に滞在したときに、約1年間、福建省東山島出身の発語者の協力によって調査した資料をまとめたものである。東山島の方言は、閩南語の系統に属する。この著作の構成は、序説(調査経過と発語者、東山島の歴史、東山島方言の音韻体系など)と語彙集、索引(日本語索引は別冊)からなっている。筆者は、言語体系の記述のほか、興味深くおもわれる東山島の生活誌全体の記述にも心がけて、島に伝わる歌謡の採集をおこなった。これは‘Hukienese Folk Songs of Tungshan Island’ (“Research on Chinese Traditional entertainments in Southeast Asia, Part 1 Hong Kong” (「尾上兼英編「海外学術調査報告 56043018」1982年3月所収)として、別に、発表された。

後者の著作は、著者の閩語研究を発展させるために、香港を調査拠点にして、閩語の閩北語をのぞく4種の下位方言(それぞれの代表地点である福州、莆田、潮陽、永安)の記述をめざしたものである。この著作の構成は、各下位方言の音韻体系の概略の説明とともに、それぞれの方言形を並べて対照的に示した4098の語彙と131の文例が収録されている。

筆者の執筆による「閩語」「閩海方言」「閩東語」「閩南語」「閩北語」「海南語」の6項目(『言語学大辞典』三省堂 第1巻〔1988年〕、第3巻〔1992年〕)の記述は、上述の閩語研究にもとづいたものである。

4 粵語の記述的研究

粵語とは、漢語のなかでも、主要な大方言群のひとつで、使用人口は、5千万人にのぼると推定されている。一口に「粵語」といっても、その内部は、多岐にわたっていて、言語学的には、複合的方言群とみられている。

粵語の中心は、広州市と香港とのふたつの都市を擁する「珠江デルタ」とよばれる珠江の下流域である。ふつう、「広東語」と言う場合には、粵語のなかで、標準的地位をもっている広州方言をさしている。広州に隣接する香港では、広東語が通用している。

筆者は、1973年7月から現在に至るまで、香港に長期にわたって滞在する機会がたびたびあった。筆者は、現地において、広東語に習熟する必要もあり、また、この言語へのたゆまない興味がいくつかの実用書を書ききっかけとなった。それら数種のうち、『広東語4週間』(大学書林 1981年 pp. 333)と『現代広東語辞典』(大学書林 1994年5月 pp. 801)の2冊は、現代広東語の完全な記述をめざしたものである。前者の著作では、いくらか誤解を招きやすい「4週間」なる名称をつけているが、そこでは、広東語の習得を目標にして、文法の説明に重点をおいて、広東語の構造が、順を追って、体系的に記述されている。

後者の『現代広東語辞典』では、巻頭に「粵語の研究史」をつけて、16世紀末から現在までの研究史を、西洋、中国、日本の3つにわけて詳述している。凡例では、広東語の音声と音韻を簡潔に述べている。収録語彙は1万7千語、巻末には、広東語音を検索する4種の索引が付されている。

5 僮（チュワン）語の記述的研究

僮（チュワン）語は、南方漢語に属する言語ではなく、タイ諸語の1種である。系統分類からすれば、前に掲げる4種の南方漢語と並ぶものではないが、筆者の記述研究の対象としては並列的位置にあるとかがえ、ここにおきたい。筆者は、粵語と関連の深いチュワン語に対して、強い興味をもっていた。広西壮（チュワン）族自治区には、1978年には桂林、1979年には武鳴を、それぞれ短期に旅行する機会がえられたので、現地においてチュワン族の発語者の協力により、簡単な言語調査をおこなうことができた。AA研の紀要に英文で発表したものがその報告である。武鳴のチュワン語については、李方桂の研究（『武鳴土語』1956）があるので、そのデータと比較して、いくつかの音韻的差異を見いだしている。

第2部 満洲語

小序

中国で「満族」と呼ばれる人々は、全部で、982万人いる（1990年の統計による）。これに、新疆省に住む満族と同じ南ツングース系の子孫のシボ族173万人を加えると1155万人になる。80年代の初め頃には、400万余といわれていたが、現在示している数字は、その後の自然増ではなくて、中国の国情の変化にともない、それぞれの民族がアイデンティティーをもとめて、自己主張を始めた結果とうけとることができる。

中国の東北部では、黒龍江省のいくつかの部落で老人たちが満洲語を話しているが、漢化の勢いのなかで、今や、消滅しようとしている。新疆のシボ族は、18世紀、乾隆帝の時代に、辺境の守りのために該地に配備された満洲族の後裔である。シボ族は遥遠の地でハサク族やウイグル族などの異民族と雑居するなかで、言葉については、かえって保守的となり、自分たちの言語と文化を失わずにすんだのだった。

満洲族が自らの言葉を忘れた主な原因は、早くから文化と文明を発展させていた人口の多い漢族と接触したことである。日常生活でも漢語の知識なしではやっていけず、満洲語は二義的なものになってしまったのだった。

しかし、現在、このような絶滅寸前の地位にあるにもかかわらず、満洲語は東アジアのなかでは、重要な言語であることには変わりはないのである。

それは、満洲人の入関（1644年）より1911年まで、250年以上の間、満洲語は清朝の公用語であって、「国語」といえば、漢語ではなくて、常に、満洲語を指したのである。18世紀までにはすでに宮廷内で話されることもほとんどなくなっていたが、官憲の業務、記録、軍務、交渉、命令など一切の公文書は最後まで満洲語と漢語の両方で書き綴られていたからである。

筆者は、満漢合璧資料を主とした文献的研究によって、アルタイ語とシナ・チベット語との言語接触の問題について論考を加えている。

第3章 北京の満洲人の家庭の言語

北京の満洲人の家庭での見聞によって、満洲族の言語生活の一端を記述している。

第4章 満洲語の「猿」と「猴」——アルタイ語とシナ・チベット語との接触

筆者は、ここで、満洲語の「さる」の意味を表す monio と bonio の2つの単語をとりあげて、アルタイ語とシナ・チベット語との言語接触について考えている。

第5章 北京図書館蔵『清字解學士詩』の研究

清代の早期に作られたと推定される『満漢同文雑字』（北京図書館蔵）に付されている、「清字解學士詩」についての文献的・言語学的研究である。この「清字解學士詩」は、その存在が書名によって知られながら、内容については、今日まで永く伝えられるところがなかったものである。筆者による最近の発見によって、この作品が、満洲語史研究にとって、貴重な資料となることをこの論文においてあきらかにしようとしたものである。本論文は、文献に対する考察、言語学的考察、テキストの全訳と訳注、テキストの影印からなりたっている。

第6章 電脳処理『御製増訂清文艦』（コンピュータによる満洲語文献の解析にむけて）

満洲語には、膨大な量の翻訳文献がある。満洲人は、中国の高い文化を摂取し、教化と教育に利用するために、中国の古典や経典を正確平明に翻訳していたのである。また、康熙、乾隆にわたって、増訂を経て成った『五体清文艦』をはじめとして、対照辞典や解釈辞典の類がたくさん刊行されている。今日、満洲語は言語学的目的のほか、清代史を研究するのに欠かせない言語となっているのである。

筆者は、満洲語に対するかくのごとき研究の価値をみとめ、満漢合璧資料としてもっとも基本的な『御製増訂清文艦』の解析にとりかかった。この満洲語と漢語の対照及び満洲語による語義の解釈が付された膨大な辞典にとりくむには、もっとも現代的な解析方法であることが賢明であると考えて、勤務先のAA研のコンピュータを利用して、作業がはじめられたのであった。

『御製増訂清文艦』の全文の入力にあたっては、記載された漢文と満文の解読が必要であって、この4年間、不明な箇所にあつたたびに、北京で、シボ族の先生に、じかにたずねて明らかにすることができたことは幸いであつた。コンピュータによって入力したデータの機械処理には、同僚の技官があたってくれた。そのようにして、これまでに9巻までを処理して、現在（1994年4月）までに、『電脳処理 御製増訂清文艦』（第1冊と第2冊）として刊行できた。AA研は、かつて、その創設期に、『満洲口語基礎語彙集』（山本謙吾著 アジア・アフリカ言語文化研究所編 1969年）を刊行して、斯界において高い評価を得たことがあつた。これは、日本在住のシボ族の発語者を研究対象にした言語調査をまとめたものである。満洲文語の研究にとっては、清文艦はとりわけ貴重な文献であることはあらためていうまでもない。この方面の研究を継承するためにも、第3冊以降

の続刊に努力したいとおもっている。

論文審査結果の要旨

本論文は、総説と2部全6章より構成される。総説では自己の行った言語調査の実態について概括するとともに、本論文を一貫する言語接触論を提示し、この視点よりする研究によって、中国境内の言語間における借用語彙、音韻・形態、さらには統語レベルにおける相互作用の問題が明らかとなり、ここに言語変化の過程の本質を解明する鍵があるとする。

第1部では漢語の諸方言が考察される。まず小序では、漢語の北方方言・南方方言についての簡潔な説明がなされる。ついで、南方方言ことに粵語に音韻・語構成・統辞構造の面でタイ語・ヴェトナム語等と一致するものが多いのは、古く先住民(タイ系)の居住地に漢族が浸透し、言語接触した結果の所産であるとの興味深い指摘を行い、以下の論述の起点としている。第1章では北方漢語を考察する。第1節では甘粛のラプラシ・民勤の両方言を取りあげ、前者に非声調言語化、代名詞における双数標示・格標示の存在、文の基本構造としてのO V型の存在など、濃厚な非漢語的特色の備わることを見出し、それは該地を包囲する形で存在するチベット語アムド方言との言語接触の結果生じた特徴であるとする。後者についても、声調の簡略化や一部子音の音声学的分析により、該地周辺部の遊牧民の言語との接触を想定するが、ともに首肯し得る推論である。第2節では中原官話に属する獲嘉方言を取りあげ、特に同一の動詞が場合により母音交替を起こすこと、その現象が山西・山東など隣接諸地域の一部にも存在することを指摘するのは、従来孤立語とされてきた漢語の古層の研究に大きく見直しを迫るものである。第3節では山東方言について特記すべき特徴を挙げ、またこの方言には歴史的な理由から漢語の古層の残存と見られる音が存在すると指摘する。第2章は南方漢語である。第1節では呉語を取りあげ、はじめに呉語全般について論じ、ついで最も有力な呉語である上海語について分析する。ここでは地域による相違のほかに世代の相違もあり、老人層の「旧派上海語」と中青年層の「新派上海語」の区別が認められるという興味ある指摘を行っている。第2節は湖南省の湘語についての考察である。湘語を省境界部と「老湘方言」と呼ばれる省中央部に分けて比較考察した結果、境界部の方言は隣接する北方方言・贛語等の影響を受け変容しているが、中央部ではその古形を保ち、古層を保存するとされる他の呉語・閩語・粵語など南方方言と一致すると指摘する。これは同一言語の方言間における言語接触の一事例である。第3節では閩語を扱う。閩語の概略的説明の後、特に南方方言における全濁声母の多様な表れ方に関して、粵語及び新層の湘語とともに閩語の口語音層では無声非帯気音となっていることを、中国南部に広く分布する帯気音を持たないタイ系諸語との関わりから考えようとするのは、従来に見られない新しい見解であり、今後の当問題の研究の1つの出発点となるであろうことは疑いない。第4節は粵語についての考察である。複合方言群とされる粵語の中から標準的位置を占める広州方言を選び、

言語調査に基づきつつその主要な特色について、記述的立場から7声調を認めるところに新しい見解がある。そのほか、文白の問題、母音の長短による音韻論的対立の問題などにも論究すること、粵語の口語層に広西壮族自治区・雲南省・貴州省等に分布する僮（チュワン）語などタイ系諸語由来と考えられる語彙が存在するとの指摘は、粵語と僮語とで音韻体系全般にわたり共通するところが多いとの次の第5節における論述とあわせ考えるとき注目するに十分であり、この方面の研究の更なる深化が期待される。

第2部では、満洲語についての考察が行われる。満洲語は満洲族の言語であり、清朝では公用語であったにも関わらず、現在ではほとんど死語に近いとされる。第3章では、満洲語の音韻・語法について概略的説明が行われ、第2部の導入的役割を果たす。第4章では、満洲語の「さる」を表す monio（動物の猿） bonio（干支の申）を例として、満洲語における言語接触の問題について考察する。これらは従来満洲語固有の語とされてきたが、現代シボ語の音、満洲語文献、さらには女真語・蒙古語における当該語の語形を比較検討した結果、後者は前者より一定の音韻環境下で生じたものであり、前者も中国西南部に行われるシナ・チベット系の言語との接触による借用語であるとする。第5章は、北京図書館蔵『満漢同文雑字』という満漢対訳語彙集に付される「清字解学士詩」というテキストによって、清代早期の満洲語を音韻・語彙・語法にわたり全面的に考察し、その特徴を明らかにしたもので、漢語よりの借用語の多いことも指摘されている。第6章は、清代に編纂された満漢対照辞典中、最も基本的文献とされる『御製増訂清文艦』の満洲語研究上における重要性とそのコンピューター処理の研究上における有効性を指摘している。

以上、本論文は中国境域内に行われる複雑かつ多様な言語構成をなす諸言語の中から、特に漢語と満洲語という2大言語を中核に据え、言語接触という視点から中国の言語の多様性の問題を考察しようとしたもので、その試みは斬新である。中国境域内に見られる言語接触について、さらに広範な研究が行われることにより、その研究はさらに確固たるものになるであろう。自らの長期にわたる言語調査の結果蓄積された膨大な資料に依拠しつつ、漢語諸方言の記述的研究を行った第1部は簡明にして要を尽くし、また先行の方言調査報告を補完・訂正するところも少なくなく、その結果は信頼するに足る。満洲語の文献学的研究である第2部は、着実かつ周到な資料の検討と綿密な考察に支えられ、その論は極めて説得力に富む。総じてその成果は漢語方言研究・満洲語研究に新しい局面を開くものである。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。